

にかかって亡くなっていくとのことです。考え無量でした。

我が家にも北から逃げてきた方が親子六人同居されました。又、兵隊から逃げてきた方も住まわれました。

主人が応召された所は北満でした。千人程の部隊は十七人を残して南方へ行き、海上で魚雷にやられ全滅と聞きました。主人は居残り組の中に感謝でした。

終戦後は敗戦を信ぜず、馬賊になって戦うのだと白頭山に向かつてトラックを進めました。ソ連の兵隊とはちあわせになり、トラックは没収、兵隊は捕虜になりました。主人は運転していたので隙を見て隠れ、逃げる事が出来ました。それから朝鮮に入り、山また山を六十五日間歩いて三十八度線突破し開城に到着し、それより、汽車、船に乗り仙崎港に上陸しました。

私達家族は命あって母国へ帰り着きましたが、多くの痛ましい難民の方々、又、孤児の方々を思い、この方々の犠牲の上に今日の平和があることを思い感謝で一杯です。

## 旧満州引揚げ私の意志でない

三重県 西島 好夫

渡満から終戦まで

私は昭和六年四月、二十二歳で満州に渡った。

「俺も行くから君も行け、狭い日本にや住み飽きた。

波の彼方にや支那がある、支那にや四億の民が待つ。」

この歌詞の歌は、

馬賊の歌とも革命歌とも言われ、大正から昭和にかけて日本全国青年の、満州大陸への憧れの血潮を湧かせたものだった。

この風潮に刺激を受けた私も、「大志を抱いて大陸に渡ろう」と密かに心の中に夢を描いていた。

商船学校を卒業して国家試験に合格、甲種一等機関士の海技免状を取得、大連汽船株式会社に就職が決まって、勇躍大陸に第一歩を踏み入れた。

当時世界に誇っていた我国海運界で、日本郵船、大阪商船に次ぐ、しかも満州大連に本社のある会社に入社出

来たことは同僚友人間の羨望の的でもあった。

入社早々に、大連を基地として青島經由上海への定期豪華船のエンジニアとして人生のスタートに恵まれた。

商船士官の制服制帽で大連の繁華街を、青島の海岸どおりや上海の大ビル街を格好良く胸を張って闊歩し、青春時代を謳歌した映像が、今も懐かしく思い出される。

昭和八年五月、満州国政府の招聘を受け渤海黄海沿岸警備艦機関長に就任、海上勤務二年の後、工場監督官を拝命したが、日満両国間の人事交流により日本政府の出身関東局の技官に転補された。

昭和十二年十二月、関東州庁勤務となり大連に赴任した。

昭和十四年三月結婚、ここで私の人生行路に一大変換が始まった。

妻の父は、明治の日露戦争直後に渡満し数多くの事業を経営し、何れもかなりの成功を収めていた。

私とは郷里が同じであり、工場監督技官であった経緯から、婿養子にした私に早速事業の手伝いをさせると言うことで官吏を辞任した。

大東亜戦争が熾烈をきわめ各種の事業が統制となるや、私の事業の一つ運輸関係で関東州貨物自動車統制事業協会の責任者として、関東軍々属として応召関東州内に陸軍飛行場の建設に挺身した。

戦時中は自分の事業より民間警防団幹部や地区住民代表など、特に応召者の留守家族の世話に忙殺されたが、海軍士官の兵籍にありながら自宅から通勤の出来る、関東軍への応召は身に滲みてあり難いものと、昼夜を問わず献身奉仕した。

二十年六月頃になると、満人の間で「日本が戦争に負ける」と言う噂があちこちで囁かれていると、女中の姑娘が何処からか聴いて来て告げた。大連はアメリカの航空機B29が二回飛来したが全く被害もなく、我々もまさかと思いきってはいしたが、日が経つにつれて不安の気が濃厚になって来た。

七月の中頃になって、四十歳をこえるこの人までと思われる男子に、軒並に召集令状が来た。

三日分の弁当と着替えを風呂敷にして持参、集合場所は極秘で、見送り一切厳禁。こうなると噂も無視出来ず、

いよいよ不安焦燥が募るばかりだった。

八月に入ると、二三日中にソ連軍が満州になだれ込んで来るとの情報流れ、これはかなり確かなものだと感じられた。

既に満州の奥地方では、嘗て無敵と誇った、関東軍の防衛力はゼロに等しく、留守家族を護る婦人が老人子供を連れて、ソ連軍の進撃から避難を始めているとのこと、相次いで伝わって来た。

南満州地方の邦人と大連市民の恐怖への動揺はいよいよ激しくなり、市内全域の隣組では毎夜集会を開き対策を討議したが、便りとなる人は皆心召で、寄れば唯最後をどうしようと言うだけで、悲壮な決意に話しが集中するばかりだった。

八月十日前後の集会には、どうせ皆殺しにされるなら拳がって自決しようと、殆どの隣組では白い粉の青酸カリを一人一包づつを配布し、万一に備えた。

十三日になると明後日正午天皇陛下の特別ラジオ放送があると、これは関東州庁からの正式な通達として市民全員に伝わった。

このことがまた、いよいよ敵中へ躍り込んで行くと、迎せられるかもしれないと早合点する者もあって、動揺甚だしく騒然として十四日の夜、市内全域で最後の集会が夜を徹して開かれた。

生死の境となった非常事態に追い込まれた瀬戸際迄、子供と老人を預かり銃後を護って来た婦人達の悲壮な決意振りに、私は感動して涙が溢れるばかりだった。

一睡も出来ず十五日を迎え、地区代表の一人として正午関東州庁に行つて見ると、州庁職員も警察官も既に敗戦を意識してか、無言で呆然としている。

今の今まで張り詰めていた気力が吹っ飛んでしまい、絶体絶命の宣告を受けた感じだった。

いよいよ来るところまで来た、正午を期してソ連軍に体当たりして果てる覚悟で、陛下のラジオ放送を待った。

日本が無条件で降伏すると言う玉音、思わずその場に平伏、誰からともなく号泣となり、いつの間にか居合わず全員慟哭の場となり悲壮極まる雰囲気包まれた。

陛下のお言葉が終わった瞬間、日本は敗戦国となり数十年掛けて築いた権益のすべてを放棄し、建国後僅か十

数年足らずで理想国家の礎を漸く固めた満州国は、幻の国と消え去った。

それと同時に在満邦人が我が国策に従って心血注いで築き上げた各種の事業は潰滅、土地家屋等莫大な個人資産も失う憂き目となった。

私事ながら、昭和六年四月大志を抱き渡満、二十二から三十六歳迄の文字どおりの青春時代を身も心も注ぎ尽くし、これから義父の事業を継承し、何れは大陸に骨を埋める覚悟でいた夢は、果敢なく消え去った。

大連で生まれた子供らには、掛けがえのない生まれ故郷であり、満州で育った妻にも私にも満州は第二の故郷には間違いない。

「ふるさととは遠きにありて思ふもの。」とか、年老いて益々満州への慕情が募るばかりである。

終戦から祖国へ引き揚げるまで

昭和二十年八月十五日天皇陛下のお言葉で戦争は終わりましたが、ソ連軍と八路軍の占領下におかれた満州には、また新しい日本人虐待の一方的な戦争同様の事態が頻発しはじめた。

日本の警察が姿を消してからの治安は全く乱れ、百鬼横行欲しいままで、日夜を問わず生命財産の保障されない生き地獄の毎日だった。

私の家も二度襲撃にあったが、始めのグループには朝鮮人二人が混じっていたのを目撃した。

ソ連と八路の兵隊に生命までも脅かされ恐怖のどん底に落としこまれているとき、日本共産党員だという青年十数人が、大連地区に乗り込んできた。

彼らは、年齢三十歳前後で全員が延安から来た党員だと豪語し、日本人労働者の看板を揚げた事務所を開設した。

まづ彼らの始めた活動は、終戦まで大連地区で活躍していた事業家を、次々に事務所と呼びついたり住宅に訪問するなどして、金品を強要した。

更に、人民裁判と称して嘗ての知名士を、日本人を集めた集会の壇上に立たせ拷問するなど、実に眼にあまる暴行を繰り返した。

日本人が日本人を辱めている光景を見て、満人たちは拍手していたがなんと情け無いことかと涙が出た。

再三彼らに辱められた老事業家は、たまり兼ね自害した気の毒な事件まであって、戦々恐々であった。

私も養父と共にリストに載っていたが、私どもには手の出せない理由があった。

ソ連軍が進駐して来た直後、私は司令部に呼び出された。

何事ならんと恐る恐る行つて見ると、私が経営していた炭酸ガス工場を至急に復活して、ソーダ水の原料を製造せよ、そのため私をソ連軍の顧問第一号に任命する、と言うのだった。

これから進駐して来るソ連兵士がウオッカ酒を飲むのに、欠かせないブレーンソーダの原料製造工場の顧問となつて、「西島に危害を加える者は銃殺に処す」と私の家の門に掲示板を掲げてあつた。

如何に傲慢な共産党のメンバーも、私がソ連司令部のジープで通ると笑顔で会釈していた。

ソ連軍司令部に顔の効く私には、共産党の青年等は問題でなく、私親子には一切避けていたようだった。

終戦の年も暮れに近くなり寒さも厳しくなるに従い防

寒着や暖房に経費が高み日に日に生活が苦しくなりその日その日必要な物以外は、食料品に当てるため街頭に立つて売り歩かねばならなかった。

二十一年になると、胡盧島から引き揚げ船が出たが、大連からの引き揚げは全く考えていないと、ソ連軍司令部は言い切っている。

満州奥地方面から大連市内へ雪崩れ込むように数万人達が、何れは大連からも引き揚げ船が出るだろうとの望みを持って避難して来たが、それは全くの予想違いだった。

黒龍江省、吉林省の奥地から避難する途中で、餓えと寒さと、また何百キロの歩行に耐えられず、置き去りにして来た子供、何時か迎えに来れると満人に預けた子供、疲れ果て死んだ母親に取り残されて彷徨うていたところを満人に助けられた子供、この子たちが今日四十幾歳かに成長して残留孤児となっている。

何十日も掛かって漸く大連に辿りついた邦人達に、先ず住む家の世話をしなければならぬが、今まで在住していた市民でも大きな家は接收され、特定の地域に強制

移住をさせられた矢先のこととて、此の上もない困難だった。六畳の部屋に五人家族はまだ良い方で、四畳半に五人、六人となると押し入れに子供達を寝かせた。

現住民と避難民の区別はなく住宅の調整、食糧と日常生活用品の確保、職業の斡旋、病人の看護、死亡者を茶毘にする石炭の入手など、筆舌に尽くせない苦勞があった。政府とか役所とかの機能の失われたこの際、「日本人合作社」と言うものを設け、その理事長を引受け、幸いにソ連軍司令部に出入りしていた関係もあり、この仕事は満人からも日本人労働組合からも迫害も受けずに、活発に活動することが出来、ほんとうに救われた。

加藤三郎一家が八路軍兵士に一寸した嫌疑で捕らえられ、翌日全員銃殺されると聞き驚き、この家族五人の貰い下げに必死で成功した思い出がある。

加藤氏は、引き揚げ後三重県松阪市駅前で煙草小売店をして居られたが、今は故人となっている。

ご生前逢う度に、あの時の恐ろしさを物語っては、感激を新たにし命の恩人と深々と頭を下げられた。

また、引き揚げ後紀州阿田和町長になった小林貞一氏

は、終戦まで関東州庁の警務科長と警察署長を勤めていた関係で、真っ先にソ連へ連行されるのを貰い受けたが、故人となられるまで感謝しておられた。

無警察状態に加えてソ連、八路軍の残虐行為は跡を絶たず、一般人の日本人に対する横暴も日とともに高まるに連れ、生命も危険に晒される状態から、邦人の全ての人が一日も早く日本に帰りたいと念願したが生地獄の儘の状態は、とうとう一年を過ぎてしまった。

たまり兼ねて、「日本人引揚対策協議会」と言うものを、数区に分けて設立、私も委員長の一人となって連日ソ連軍司令官を訪問嘆願したが「日本政府に頼め」と、受け付けなかったが、強硬に頑張った。

また寒い冬が来ると寒さ凌ぎに苦勞が重なると気を揉んでいた時、ソ連司令官から呼び出しがあり、引き揚げを開始すると通告されたときには、夢かと疑うほどに感激、躍り揚がらんばかりに喜んだ。

二十一年秋半ばの一日、じごくに呻吟している邦人を迎えに、大連埠頭に着岸した引揚船を訪ねた私は、十五年前此処に上陸し、その後も上海への定期客船で華々し

く船出した当時を追慕し、胸を裂れる思いがした。

引揚船は数日毎に約千二、三百人を乗せて、舞鶴と博多へ交互に大連を出帆して行った。

船の出る度に、引揚対策協議会委員長の私は、岸壁に立って「ようこそ、がんばって下さった。栄養失調の身できょうまで持ち堪えた体です。敗戦で焦土と化している祖国に帰ったら、健康を取り戻し、満州で鍛えた精神で日本の再建に、もう一度大活躍して下さい。にっぽん国万歳。」と、涙いっぱい声をかきりに見送った。

二十二年二月末、大連からの邦人引揚げを完了した後、家族四人を連れて最終使に乗船、舞鶴に向かって出航した。

真冬の玄海灘は荒れに荒れ狂うていた。その荒波の中へ四歳になる娘を、親の私が投げ込んだ悲しい事件があった。

乗船したとき元気だった娘が、エキリ症状で船医に見せたところ、注射一本すると娘はそのまま身ぶるいして、息を引き取ってしまった。船医だと称して乗船していたのは、臨時に雇った医学生だったとは、諦められない話

である。未だ免許をもたぬ医学生の診断で、病名も明かさず診断書もない水葬だった。

終戦後の混乱から生き延びて来て、明日は祖国の土を踏むと言うのに可愛そうで残念だった。

家族の大黒柱とも頼む方々が、殉死の戦死をされたことに比べれば、海軍士官として兵籍にあった父に代わって海中に葬られた娘よ、静かに眠れと冥福を祈るばかりでした。

「国敗れて山河あり」春まだ浅い祖国の山々が、舞鶴に入港する引揚船から見えて来たとき、甲板に飛び出した引揚者は、感極まって声も無くさめざめと頬を濡らしていた。

終戦後の生き地獄から、夢見つづけた憧れの母国へ辿り着いて、やっと安堵の胸を撫で下ろしたのだろう。

着のみのままリュックサック一個を背負った、見すばらしい姿の満州からの引き揚げ者達は、この日に始まる人生への厳しい再出発の決意を、胸に刻んでそれぞれの故郷へ散って行った。

引き揚げ後の再起動静

玄海灘の悲しみがまだ覚めず、悄然として郷里の実兄宅に先ず寄寓することとなった。兄夫婦と家族の心の籠もつたもてなしに感激し、親戚をはじめ村人達の好意に甘えて、日が経つに連れて気分も次第に落ち着いて来た。満州で華やかに活躍していた頃、郷里を訪ねた時の誇らしさに比べて、何と肩身の狭いことかと、つくづく我が身を哀れに思ったが、何とか身の振り方を考えねばと思案している時、突如思いもよらぬ事が持ち上がった。二十二年三月始、郷里に落ち着いてまだ十数日後のこと、引揚者団体の代表だという三人が訪ねて来られ、四月二十五日に行なわれる衆議院議員選挙に、推薦応援するから是非立候補してほしい、とのこと。

一人千円の持参金で引き揚げて来て、選挙資金は無一文、生家の父や兄は近郊一带に多少の顔があつても私は長年海外に居た新参者、然も憲政の神と言われる尾崎野堂先生の選挙区、どう考えても当選見込みないと、断り続けたが、引き揚げ者の立場を日本の政治に反映させる為にと、執拗に口説かれた。

今日、考えて見ると冒険も甚だしいと思われるが、終

戦直後の混乱期には今頃の選挙に対する考え方とは全く違っていた。

新しく若々しいものを、がむしゅらに求めた時代だったというのか、その気運を察して、私は果敢にも立候補を決意した。

自分で県庁へ立候補の手続きに出頭すると、受付で貴方は候補者の秘書ですか、と尋ねられ、当時紙が統制されていてポスターの紙が、選挙始まってから一週間後に配給されるなど、候補者も応援者も素人はかりの陣営だった。ただ私は終戦後大連で、労働組合の連中を向こうに廻して大衆の前で、演説したりすることに馴れていたため、選挙に臨んでの立ち会い演説会には臆面もなく、他の候補に立ち向かった。

無所属で立候補したが、時の改進黨総裁犬養健が応援に来たり、出身地の村人が文字通り手弁当で応援して下さったお陰で、終盤戦には有力候補の一人となった。

満州から引き揚げてきて二か月足らずの衆議院議員候補者として、僅か百七十票の差で涙を吞んで次点に終わったが、一躍私は名を揚げた。国会議員選挙になると今も



よく出る話題の一つになっている。

二十六年四月、三重県議会議員となり、議員活動に励み議会内の各特別委員長、副議長、四十六年五月に県議会議長を最後に政界を引退した。

議長在職中、全国都道府県議長会地方行政委員長、内閣地方制度調査委員、大阪万国博覧会理事など。

二十七年五月から、笹川良一氏と共にモーターボート競走会を設立、全国協議会長、三重県競争会長など日本モーターボート競走事業関係に三十余年関与した。

三十五年八月、日本経済使節としてソビエト連邦へ、その後世界三十余国を訪問した。

外遊の中で、四度ヴァチカン市を訪問、パウロ六世ローマ法王に四度面接勲章とメダルを拝受した。

五十四年四月、三重県功労県民表彰を受賞する。

五十四年五月、ローマ法王の推薦により、イタリーフ

ローレンス美術学会名誉会員となる。

五十六年四月、春の叙勲により勲四等旭日小綬章を拝受した。

五十六年八月、ブラジル国イピランガ勲章、コメンダ

ドール勲章及び他の勲章を受賞した。

その他、海洋青年大学総長 日本青年訪中代表

団長 勅使河原蒼風顧問等を務めた。

現在、三重県文化財保護審議会々長 伊勢神

宮崇敬会常務理事

交通安全保障協会々長

五十八年九月、大連から引き揚げて三十六年後、中国青年連合会の招きで、旧満州国の主要都市を訪問する機会があった。

新京、奉天、ハルビン、大連と廻ったが、長年住んでいた大連の我が家を訪ねた感激は、何とも言いようのないものだった。本宅は事業の本拠地大石橋にあったが、私達夫婦と子供等は大連の此の別荘に居た。

三千坪の屋敷に二百坪の贅沢な建物、郊外に九万坪の林檎園、会社工場が三か所、大石橋には滑石の鉱山と工場二か所があった。何れも養父が、明治、大正、昭和にわたって築き上げた事業で、私が継承したもののだが、これらはみな中国政府に取り上げられたもの、現地を訪ね涙の対面、感慨無量であった。

私は、既に八十一歳、妻は七十四歳、子供達もそれぞれ成長したが、引揚者としては恵まれていると感謝している。引揚者処遇問題に就いて政府との折衝等にお骨折り頂いている関係各位に深く敬意を表し、併せて今後の関係事業の推進に格別の御尽力をお願い致したい。

## 救われた我が命

東京都 中山 菊松

私は今迄に幾度か「通化事件」に関して、諸誌に断片的に投稿しておりましたが、この度は、私記として当時の私の個人的行動について記憶の明らかなうちに、とりまとめて書きのこしたいと思います。通化事件が起きたのは、昭和二十一年二月三日（一九四六）すなわち敗戦の翌年である。戦勝国の外国の地にとり残された敗戦国の日本人達は、助けを求めることもならず、無政府状態の中でなされるままの、不安の日を過ごしていた。

旧満州国通化市（現、吉林省通化市）は、通化省一帯

の鉱山資源開発のための重要基地として沢山の日本人が働いていた。又山岳地帯であるために、ソ連軍の戦車等が侵入出来ないという地の利があつて、終戦直前には関東軍の死守の地として関東軍首脳をはじめ諸部隊が集結し要塞化されていた。従つて安全地帯と思うところに人は集まつて来るもので当時の満州国官宮内府一行、政府機関、それに満州各地からの軍人の家族、官公吏の家族、開拓者の家族、避難民、疎開者等々、今迄の何十倍もの人々が押し寄せて来たところで敗戦の八月十五日を迎えた。汽車もストップしてしまつて日本人は袋の鼠同様であつた。頼みの綱の関東軍の軍人達もソ連へ連行されたり、姿を消してしまつた。新たに組織された日本人居留民会も何の力もなく、食糧等生活必需品も没収される有様では明日の生活すら不安で、生きるあても帰国のあてもないながらもそれぞれが苦勞を尽くして敗戦から半年がすぎようとしていた。

その間、中国側の八路军（現中共軍）と中央軍（蒋介石軍）の交戦も通化一帯で度々あつたが、やがて通化は八路军の手に落ち、日本人もその軍政下におかれた。